

青い死の果実

柏原 兵三



青い死の果実

柏原兵三

青い死の果実

昭和四十五年 二月二十五日印刷
昭和四十五年 二月二十八日発行

定価五五〇円

著 者 柏 原 兵 三

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(03)二六〇、一一一一

振替 東京 八〇八 番

郵便番号一六二

(乱丁・落丁本はお取替えいたします)

印刷 株式会社金羊社 製本 共同製本所

© 1970 Hyozo Kashiwabara Printed in Japan.

青い死の果実

第一章

ある日突然大阪から長距離電話がかかって来た。しばらく待たされたのち長兄の声がした。暇だったらすぐに来てもらえないかというのである。いったいどうしたの、と私はいった。実はな、と兄はいった、二週間前から精密検査のために大阪のO病院に入っているのだ。また入ったのか、と私は心の中で苦々しく思った。ここ二年ばかりのあいだに、兄はすでに三回も大病院に入院して精密検査を受けていたのである。

もしどうしてもというのだったらすぐ行くけど、と私は少し迷惑そうな調子でいった。その日は丁度、大学時代最後の秋休みを利用して長いあいだ計画して来た北海道一周旅行に友人と出かける前日にあたっていた。私はその事情を説明し、もし急ぎの用でなければその旅行から帰ってからにしてもらえると有難いのだけれども、といった。いつ頃帰るんだ、と兄は聞いた。二週間位で帰って来るつもりだけど。そんなに行っているのか、と兄はいった。お母さんでは

いけないの。お前でなくてはならないのだ、と兄は答えた。精密検査の結果はもう出たの、と私は肝腎なことを聞くのを忘れているのに気づいて訊ねた。ああ、出たんだ、と電話の向うで兄の元氣のない声が答えた。それでどうだったの、どこか悪いところが見つかったの。私は急に不安を覚えて聞いた。どこも悪くないんだ。それじゃよかったじゃない。私はたった今中止しようと心に決めた北海道旅行に再び出かけることに心を変えてそういった。やっぱり北海道旅行から帰って行くことにしますよ、いいでしょう、それでも、と私は駄々っ子にいい含めるような気持でいった。そうか、と兄は諦めたようにいった。じゃあ、そうしてもらおうか。

一時間もすると、兄からまた電話がかかって来た。北海道旅行を延ばしてすぐに来てもらえないかというのだ。旅費はこっちで負担してもいいという。私はその瞬間北海道旅行の延期を決意して、じゃあ、今晚の夜行で発ちます、と約束した。すまん、と妙に気弱になった兄の声が答えた。——そうと決れば北海道旅行を共にする友人に事情を話すのが先決だった。予約の取消など大変だけれども仕方がなかった。私はすぐに友人に電話をかけてみたが、あいにく友人は留守だった。するとその電話を終わってものの三十分も経たないうちに、また兄から電話がかかって来た。考えてみればお前でなくてもよかった、おふくろでいいからすぐ来てもらって欲しいというのである。私はこれ幸いとばかりこの兄の方からの変更に飛びついた。そして大阪には私が出かけないで母が行くことになった。

二週間の北海道旅行を無事終えて帰って来ると、私は真先に母に大阪行きの模様を訊ねた。

母の報告によれば、兄は別にどうということもなかった。精密検査の結果どこも悪くないという事実が明瞭になったために、すっかり拍子抜けがしてしまって、一種の惑乱状態に陥ったので、急に相談する相手が欲しくてたまらなくなった、電話をかけた時がそういう状態だったのだ、というのだ。それでお母さんが行った時はどうでしたか、と私は聞いた。もう大分落着いたようよ、と母は答えた。母が行った翌日には兄はもう退院し、その次の日には出社したので、母は兄の宿舎に二泊しただけでもう帰って来たのだという。

この兄は旧財閥系の船会社である帝国汽船の社員であったが、もう長いあいだ身体の不調をかこっていた。それは入社して四年目位に始まった。肩の凝りが異常に激しく、身体の隅々が痛み、その上頑固な不眠症に悩んでいた。彼は入社してすぐ身体が大きく強健そうなところを目をつけられて、帝国汽船の誇る端艇部に勧誘され、たちまちレギュラーに選ばれて猛練習にしがかれた。彼の身体の不調は四年目に端艇部の第一線を退いた頃から顕著になった。神戸支店に転任になるまでのあいだに、半年位の間隔をおいて三回も病院をそのたびごとに変えて精密検査を受けたのもそのためだが、結果はいつも完全に白だった。彼はしかしかたくなに身体のどこかに故障があるものと信じ続けた。彼はある日名医によって長いあいだ彼を苦しめて来た身体の故障が発見され、その故障を直してもらうことによって、ここ数年来の身体の不調を一気に取り除くことができるのを待望し、その日の到来を憧憬していた。そうなったらどんなに精力的に、今よりも数倍も、数十倍も、働くことができるか分らない。自己の能力を、長い

あいだ眠っていた能力までもすべて覚醒させ、動員できて、最大限の可能性を展開できるだろう。そして生前一部で神話的な存在となっていた「偉大な父」をしのぐような男になれるだろう。彼の言葉によれば、このような身体の不調にもかかわらず、このように大きなハンディキャップにもかかわらず、彼は同期の十数名の大学出の社員の中のトップ・クラスにある、それは彼のこれまで辿った経歴が示し、彼が営業部において挙げた成績のすばらしさが如実に語っている、というのであった。実際客観的に見ても、兄のそのような豪語には、かなりの裏附けがあり、決して単なる思い上がりや誇張ではないようであった。つまり兄は岩見家のホープを自任してもよかったのである。

九月の末に大阪からの長距離電話があつてほぼ二カ月後の十一月に、私は再び兄から長距離電話で呼び出され、神戸まで来て欲しいと頼まれた。そして今度はすぐに行くことにした。翻訳の下請けをして稼いだ金は全部北海道旅行に使い果してしまっていたので、私は月末に家庭教師の月謝が入るまで文無しに近く、汽車賃を捻出することもできない状態にあった。仕方なしに母から借金し、急行券を節約して鈍行の夜行列車で東京を發ち神戸へは翌日の朝着くことにした。

その鈍行の夜行列車は奇妙な列車であつた。それは二輛を除いてすべてが貸切になっていたのだ。貸切になっている車輛は一輛を除いて、その頃から異常な浸透ぶりが世間の注目を惹き出したある宗教団体によって占められ、あとの一輛は聾啞者の団体によって使用されていた。

私は最初宗教団体によって占められている車輛にそれと知らないで席をとった。そしてまもなく貸切車輛であることに気づき、別の車輛に移った。それが聾啞者の団体の貸切車輛であると気づいたのは、汽車が東京駅を出て、藤沢のあたりで、急行列車をやり過すために、長時間、腹立たしくなる程長いあいだ、停車を余儀なくされていた時であった。

私は突如としてその車輛では話し声というものがまったくしないことに気づいたのだった。私はよく放心したようになることがあったが、それにしてもそれまで気がつかないでいたのが不思議だった。ともかく初めてその奇妙な事実に気づいたのである。私は茫然とした。これはいったいどうしたことだろうと思ったのだ。一人として眠っている者はいないのに、話し声を出している者がいないのだ。私は映画の画面の人物たちが機械の故障のために急に喋らなくなった時に遭遇したような思いがした。しかし現実が故障するということがあるだろうか、と私は考えた。現実が故障するということは、つまり私の耳が聞えなくなってしまうということの意味するのだろうか。それとも私は今悪夢を見ているのだろうか。その時私は前の席に坐っている二人が手真似で話をしているのに気がついた。そして私は迂闊にも自分が聾啞者によって借り切られている車輛にまぎれ込んでしまったことを覚きったのである。再び私はポストン・バッグを網棚からおろし、貸切でない車輛を求めて移動しなくてはならなかった。

ようやく辿り着いた普通の車輛に、それでも私は幸いにして空席を見つけることができた。そしてその空席に落着くとしばらくして寝込んでしまい、汽車が大阪に入るまで眠った。

神戸で降りると、大学の友人の家に転がり込んだ。友人は一年休学して自分の家に帰って本を読んだり小説を書いたりする気ままな生活を送っていたのだが、駅で電話をすると、家にいるからいつでも来いよといってくれたのである。

十一時頃友人の家の電話を借りて神戸支店に私は電話をかけて兄を呼び出してみた。すぐに兄は出て来た。彼はひどく小さな声で、聞きとれるか聞きとれない位の声で、話した。あたりを恐れ憚るような低い声だった。それが私には気になった。話は、六時に兄の指定する喫茶店で落合い、それからどこかで夕食を共にしようということに決った。その晩私は兄の宿舎に泊めてもらいたかったのだが、その時の電話ではそれを最後までとうとういい出すことができないで終った。友人の家は手狭だったから、芦屋にあるひどく豪壮らしい兄の宿舎、会社のクラブだという兄の宿舎に泊めてもらいたかったし、それにそうすれば、兄とゆっくり夜遅くまで話もできると思ったのだが、しかしその時の兄の話しぶりからはとてもそんな頼みごとは切り出せないような気がしたので。

約束の喫茶店に、約束の時刻より三十分余り遅れて兄が入って来た。顔色が悪くてひどく元気がない。

「待たせたな」

腰をおろすと兄はそういった。

ウェイトレスが注文を取りに来た。

「ホット・ミルクを下さい」と兄はいつて、私に、「お前は」と聞いた。

「僕はまだあるから」といつて私は断わった。少し前に待ち切れずに注文した珈琲コヒがまだ残っていた。

「珈琲はまだ飲めないの」と私は聞いた。

「ああ」と兄は力なく答えた。

兄は珈琲が好きだったのに、もう一年程前から珈琲を断たってしまっていた。余り飲み過ぎる珈琲に自分の身体の調子を狂わせているものがあるのかも知れない、とある時考えたのが彼にとつては運のつきだった。それから珈琲が飲めなくなってしまうのだ。その半年程前から酒が飲めなくなってしまったのと、それはまったく同じ性質の現象だった。

「みんな元気かい」と兄はミルクを飲みながら聞いた。

「ええ、元気ですよ」

「お祖父さんも、お祖母さんもかい」

「ええ、とてもお元気です」

「今晚はどこに泊る」と兄は聞いた。

「友だちのところに泊めてもらうつもりでいるんだけど」と私はいいよんだ。

「そうか、そうしてくれるか」

兄はちょっとほっとしたようにいった。

「俺の所は広いんだが、窮屈でな」

それで私は最終的に兄の宿舎に泊めてもらうのを断念せざるを得なくなった。

「行こうか」といって兄は立上った。彼はカウンターへ行き金を払った。

「調子はどう」

車道と歩道の区別のない道の端を歩きながら私は兄に聞いた。

「それが余りよくない」

兄は重い、沈んだ声で答えた。

「だって精密検査の結果はどこも悪くないということだったんでしょ」

「そうなんだが」

「どんな風に調子が悪いの」

「おいおい話すよ」

自動車が見のかたわらすれすれを疾過した。

「もってこっちを歩かないと危ないですよ」と私は兄に注意した。

「俺はな」と兄はいった。「時々自動車に轢かれて死ぬ^ひと思うことがあるよ」

「冗談をいわないで下さいよ」

私は兄の外側を歩くことにした。急に兄は黙り込んでしまつて、オーバーの襟を立てて歩いた。十一月の末だったが、夜になるともう寒かった。

兄は時々そこで刺身定食を食べるという割烹料理の小さな店に私を連れて行った。私たちは二階に上って、座敷の間を借りることにした。

女が注文をとりに来た。私は兄の財布の中身を考えながら、遠慮がちに、ビールと天麩羅を頼んだ。兄は刺身と湯豆腐とおひたしとそれからジュースを注文した。

私は兄と乾盃した。ビールとジュースの入ったコップを合わせて――

「それでどうなんです」と私はビールを飲みながら兄にいった。

「相変らずお酒は駄目なんですか」

「一滴もいけない」と兄は答えた。

私はもう何年も前に兄がちょっと好きだという女の子のいる飲屋で、兄と酒を飲み、兄がひどく酔払ってしまったことを夢のように思い出していた。

ふと私は兄がオーバーを脱がないで坐っていることに気づいた。

「オーバーを脱いだら」と私はいった。「ストープがついているから寒くはないですよ」

「そうだな」

兄はもの憂げに答えると、煙草を灰皿に置いてオーバーを脱いだ、うしろにずり落したままで、それを折り畳んで部屋の隅に置こうともしない。

不意に兄はじっと耳を傾けた。

「誰か俺たちの話を聞いている者はいないだろうか」

「聞いているもんですか」

「そうか、それならいいが」と兄は少し恥ずかしそうにいった。

料理が運ばれて来た。女は兄が脱ぎ捨てたままのオーバーをたたんで隅の方に置くと出て行った。

「このあいだ病院から電話をかけてすぐ来いといった時はどうだったの」

女がいなくなつてしばらくしてから私は聞いた。

「ああ、あの時は無理をいって悪かった。一種の錯乱状態に陥つてしまつて、怖くてたまらなかつたものだから」

「何が」

「自殺するんじゃないかと思つて怖くてたまらなかつたんだ」

「だって精密検査の結果、どこも悪くないということが分つたんでしょ」

「そう、そのためなんだ」

「俺の声はおかしくないか」と突然兄は聞いた。

「いいえ、おかしくなんかありませんよ」

「そうかな。声が今までのようになつた気がするんだ。こんな低い声しか出なくなつてしまつたんだ」

「そんなことはありませんよ、それよりもっと詳しく事情を話して下さい」

「そうだな」

兄は氣をとり直したようにいって、小さな声で、ゆっくりと話し出した。

兄の話をまとめればこうだった。

——彼は、弟の私がかねてから示唆していたこと、彼の身体の不調は一種の神経症で、病氣に逃げ込もうとしているのではないかという推定を長いあいだ採り上げようとしなかった。彼はそれを、昔ひどい神経衰弱で苦しんだことのある私の勝手な、荒唐無稽な解釈に過ぎないと断定し、あたまから問題にできなかった。彼は頑^{かた}なに、自分の身体の不調はどこか身体の物理的な故障に由来するものであると信じていた。ところが入院中に、遅蒔^{おそ}きながら、私の解釈がもしかすると本当かも知れない、いや真実以外の何ものでもないということに氣が付き出した。そしてそれが完全に自分にも納得できた途端、自分の立っている基盤^{きばん}がガラガラと崩れて行くように感じられて、急に絶望の奈落へ落ちて行くような恐怖に苛^{さい}まれ始めたのだ。

「どんなきっかけで僕の解釈があたっていると思うようになったの」と私は訊ねた。

「いろいろな検査が全部白と出たので、医者自身も首をかしげ始めた。一人の医者などははつきり神経性のものと断定したよ。しかし俺は飽くまでそれを信じなかった。東京の家のガス・ボイラーの水を調べてくれ、と電話で頼んだことがあったろう、あれはそんな時期だった」

私は兄が大阪の〇病院に入院してしばらくした頃突然電話をかけて来て、母が保健所にガス・ボイラーの水の検査を頼みに行ったことがあったのを思い出した。風呂に入って、よくそ

の水を飲んだので、ひょっとするとその水が原因で健康を害するようになったのかも知れない
と思いついたからぜひ調べて欲しい、と兄は病院に入ったことはその時隠して頼んで来たのだ
った。——水質検査の結果はもちろん異常ナシであった。

ある日入院中の兄に、兄が本社の欧州課にいた時の上役の奥さんが見舞に来てくれた。彼女は
実家が関西にあつて里帰りしたのだが、たまたま兄が入院中であることを知って訪れたのだ。
彼女は数年前にひどいヒステリー症を経験していた。兄が以前東京で入院した時、夫から兄
の症状を聞き、自分がかつて苦しんでいた症状との驚くべき類似に気づいたが、それをいい出
せずにいた。しかしまた兄が新任地の関西で入院していることを聞いて、これは自分の経験を
是非お聞かせした方がいと思ひ、恥を忍んで訪れたというのであつた。だから聞き流して頂
いて一向に構わないが、どうか我慢して一応最後までお聞きになつて下さい、そう断つて彼
女は、それから三時間にわたつて詳細に彼女が苦しめられたヒステリー症状について話して行
つたのだ。兄はそれを聞いているうち、自分の症状が、彼女が指摘した通り、彼女をかつて悩
ましたヒステリー症の症状群に驚くべく似ていることに気づかざるを得なかつた。彼女が失礼
を謝して帰つたあと、兄はまったく彼女のいったことが正しいと確信した。自分の身体の不調
は一切精神的なものであるから来ているという事実を翻然と悟つたような気がした。

もし自分の身体の不調が一切神経性のものであるならば、それは自分で努力して直すよりは
かない。それまで兄は精密検査の結果、然るべき身体的故障が医者に見えられ、それを医薬に